

国連の呼びかけで2012年に世界の科学者が集まってつくった「生物多様性および生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム」(IPBES)が最近公表した報告書では、ハチなどの昆虫や動物が花粉を運び、その受粉効果で市場にもたらす価値は世界で年間2350〜5770億ドル(約27〜66兆円)に上る。その一方で、ハチの減少や絶滅危機にある種も多く、受粉機能が失われることで、将来の食糧生産や生態系への影響が心配されている。

日本国内でも農業環境技術研究所(茨城県つくば市)の発表によると、ハチなどの昆虫が国内の農業にもたらす利益は、年間約4700億円。畜産業を除く農業算出額の約8%に相当し、うち70%は野生のハチやその他の昆虫が貢献している。玉川大学の中村純教授(ミツバチ科学研究センター)によると「実際の貢献はもっと大きいと思われる。ビタミン類を供給する果物の多くは受粉によるし、牛乳のもとになる牧草の生育もハチなどの受粉が貢献している」と指摘している。

実際に農家の方から「うちのカボチャの出来がいいのは、毎朝、花が咲く時間になると、山からミツバチが来て受粉してくれるから」とか、「今年も梅の出来が良かった。これもミツバチが来てくれたお陰だ」という話を良く聞く。カボチャの花は午前中咲くのだが、

ミツバチ目線で緑の街を④



世界で年間最大66兆円の価値 ミツバチなど昆虫の受粉の働き

NPO法人銀座ミツバチプロジェクト 理事長 高安和夫

屋上で飼育するニホンミツバチを管理する筆者



子育てを開始する。卵から幼虫、蛹(さなぎ)を経て約3週間でミツバチになり、その後、掃除や幼虫の餌係、女王蜂の世話係、巣作りなど成長に応じていろいろな仕事を経験した後、最後に花蜜を集める。

そして桜が散り2週間ぐらい経つころ巣の中は新しく生まれた働き蜂とハチミツで溢れて来る。その時期に新しい女王蜂が誕生する。お母さん女王蜂は群れの半分の働き蜂を連れて新しい住みかを探しに旅に出る。これが分封である。

たくさんのお花をだしてミツバチを誘う。また、梅の花の時期は気温が10度以下の日も多いが、寒さに強い野生の日本蜜蜂は2月初旬には卵産し子育てをはじめるので、貴重なタンパク質源となる花粉を集めに梅の花を訪れる。

こうして食料生産や生態系の維持に貢献している野生のハチやその他の昆虫は、いま手入れの行きとどかない人工林(植林されたスギやヒノキ)の拡大や都市化などの開発、農薬の使用や温暖化の影響を受けて数の減少や絶滅危機にある種も多い。

繰り返す分封を捕獲し育てる

私たちはビルの屋上でニホンミツバチを飼育している。銀座の街で分封騒ぎを起こしたニホンミツバチを救出したことが事のはじまりで、ミツバチは春先の2月ごろから産卵をはじめ新しい年の

ミツバチたちは分封を繰り返す(第1分封〜第4分封ぐらい)群れを増やしていく。その分封群を捕獲して飼育する。区役所や消防署などに連絡しておく年間10〜20回ぐらい捕獲の要請が来る。皇居や浜離宮、明治神宮や代々公園などには野生のニホンミツバチが営巣している。人に守られた自然の中でも野生の命が受け継がれている。

事業紹介

NPO法人銀座ミツバチプロジェクトは、2006年3月から銀座のビルの屋上でミツバチ飼育を開始。ホテル、レストラン、百貨店など銀座の老舗と連携したハチミツ商品づくりや屋上緑化、地域の生産者との交流事業を通して街の活性化に貢献。平成22年6月環境大臣表彰。平成24年4月農林水産大臣より「食と地位の『絆』づくり」選定を受ける。